

日帰り研修

熊本城・田原坂・阿蘇神社

吉田 勝重

(会員 佐伯市女島)

朝まだ肌寒い四月二十一日の朝七時、本年度の日帰り研修が実施された。今年の日帰り研修の目的地は熊本・阿蘇・田原坂である、会員以外の方の参加要請と本年度の大河ドラマ「西郷どん」との関係からか、七十名の参加を得た。二台のバスに分乗出発した。

今回の訪問地、熊本城と阿蘇神社は、御存じのように平成二十八年四月十四日夜九時・十六日午後一時頃の二度にわたるマグニチュード七の大地震により大きく崩壊した。その後も四千五百回以上の中小の地震が続いている。この地震により慶長十一年（一六〇六）、加藤清正が築き完成させた熊本城天守櫓の一部、宇土櫓への通路、東十八軒櫓・北十八軒櫓等が倒壊した。また阿蘇市にある国重要文化財阿蘇神社の楼門も倒壊した。私たちは、この他に

西南戦争の激戦地田原坂を視察した。



崩壊した櫓と長屋

はじめに訪問した熊本城は、三年後の熊本城天守台一般公開に向け鋭意修復中である。



修復中の熊本天守

この熊本城は佐伯藩と密接な関係がある。時代は佐伯二代藩主毛利高成の時代である。

初代毛利高政は寛永五年（一六二八）十一月江戸藩邸で逝去し、高政の次男高成（たかなり慶長八年〓一六〇八生）が藩主となった。二十五才の時である。

寛永九年（一六三二）五月、熊本藩二代藩主加藤忠広（加藤清正三男）が、幕府に意図ありとして改易され、出羽庄内藩（酒井忠勝）に配流された。

加藤忠広は父清正の逝去により慶長十六年十一才で家督を継いだ。幼少の為藩政は合議制となり後見人に藤堂高虎が任命されている。幼くして藩政をになう事の難しさや家臣との衝突、熊本藩継承時に幕府との間で取り交した九ヶ条の条件の不履行等から改易となったようである。原因は色々取沙汰されている。

毛利高成は、寛永九年、熊本城明け渡し（上使 水野勝成・稲葉正勝）の一員として、飢肥藩主伊東祐慶（すけのり岡藩中川久盛、高鍋藩秋月種春（たねはる）ともに出役を命じられた。早速江戸から佐伯に帰り、出役の準備をし、七月十六日将兵八百余名をつれ熊本に向かった。万一の場合は加藤氏と一戦を交わえるつもりであったが、幸い戦うことなく無事城の明け渡しは終わった。高成はしばらく熊本城に駐屯した。



十月、幕府は小倉藩主細川忠利ただとを熊本五十四万石に封じたので、高成は帰城のため熊本の地を離れた。道中で病を得、十一月七日旅宿にて逝去した。

佐伯藩にとつては急な事で、毛利高政の弟、森吉安よしやす（佐伯領内二千石を領地・高政側室の子吉田静馬を推挙）と家老並河信吉（高成の子、市三郎を推挙）が、次期藩主候補で対立、お家騒動となる。翌寛永十年（一六三三）二月、幕府は市三郎高直（二歳）を家督と認め、三代毛利高直と名乗る。家督争いに敗れた森吉安は知行地の二千石を幕府に返上、以後旗本となり江戸へ。

熊本城は地震後二年目を迎える。

明治十年の西南の役で焼失し昭和三十五年に復興されたコンクリート製の熊本城であったが、熊本の市民の象徴であった。現在傷んだ所を修復、全体の完成は二十年後と言われている。今年四月六

日には天守閣の瓦七千二百枚が置かれ両サイドしやちほこに鯨も付けられた。再びこのような大きな地震にあつても大丈夫なように、柱と梁はりの間にダンパーという地震エネルギーを分散する装置も取り付けるそうだ。

二〇二一年の天守の一般公開が待たれる。

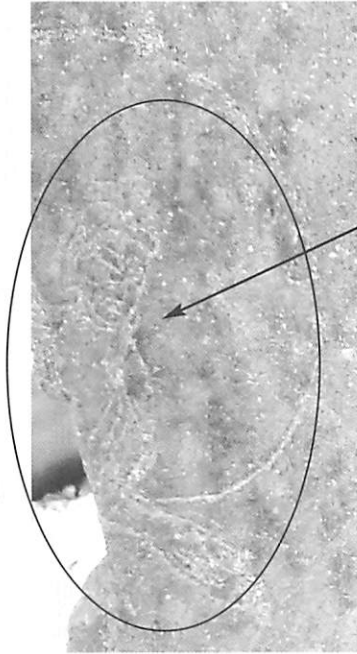
熊本城は加藤清正が天正十九年（一五九二）、熊本市北区植木町中心から南に延びる京町大地の先端茶臼山丘陵ちやうすやま一帯に、中世の城郭であつた千葉城（肥後守護菊池氏）、隈本城（鹿子木親貞かのこぎぢかかす）を取り込み改築した平山城である。天正十九年に工事をはじめ、慶長五年に天守を、慶長十二年（二六〇七）すべての工事を完成させ名称を隈本城くまもとから熊本城に改称した。

維新後の熊本藩は学校党、実学党じつがく、敬神党けいしんの三派にわれ、政権を取つた実学党が政府に城の解体を願つた。城の解体は廢藩置県後の明治政府が、必要性のなくなった全国の城郭を処理する事を目的として実施したもので、一部の城を残し城の規模により陸軍、海軍に分与された。

熊本城は陸軍が使用する事になつたが城の櫓、屋敷等は徐々に解体され、本丸と一部の櫓を残すのみとなつた。明治四年、熊本城二の丸は県庁に、花畑邸は鎮西鎮台ちんせいちゆうだいとし

て使用されるようになった。その後、鎮西鎮台は拡張され名を「熊本鎮台」と変え、九州全体の治安の要となった。明治十年の西南の役の時、北上する西郷隆盛軍（一万四千）とそれを阻止しようとする熊本鎮台軍（司令官谷干城・四千人）が戦った所である。鎮台司令官谷干城は熊本城の堅塁を頼って五十二日間の籠城戦を実現した。西南の役最大の決戦であった。

仏像の一部が残る



ガイドさんの話に「熊本城」を築城する時、石垣になる石を各地から集めたという。その石の中には、神社の礎石の一部や各地の石塔石仏などがあったという。これは中

津城の石垣の一部にも見られる。

また、熊本城の堅固さは、長方形の石垣が交互に組み合わせられた算木積方式によるもので、石垣の中に栗石と呼ばれる小石が詰められ、お互いが隙間を作り排水をつかさどるといふ仕組み事だった。今回のような大地震のエネルギー・衝撃も吸収分散するといふ。

西南戦争時、四千人の鎮台兵が、一万四千人の西郷軍を寄せ付けなかったのも「武者返し」とよばれる石垣づくりによるものであった。残念ながら熊本城（熊本鎮台）は官軍総攻撃の前日失火により焼失してしまった。（昭和三十五年再建）

西南戦争とは明治十年二月十七日西郷隆盛らが兵一万二千で鹿児島を出発してから、九月二十四日の鹿児島城山総攻撃により西郷隆盛が自決するまでを言う。

この戦いには、西郷軍と西郷軍の考えに賛同する各地の士族が兵を挙げ参戦（薩摩軍三万人）。全国から動員された鎮圧部隊六万が動員され、七か月にわたり各地で戦闘が実施された。

この西南の役の前年には、神風連の乱や秋月の乱、萩の乱などの士族の反乱がおこっている。この内、神風連の乱

は西南の役の前年、明治九年に熊本士族太田黒伴雄おおたかくらともおを中心とする敬神党によるもので明治政府に反対する乱であった。さらに西南の役が開始されると、熊本士族学校党がっこう(党首・池辺吉十郎いけべきちじゅうろう)を中心とする熊本隊が結成され西郷軍に参加した。他に熊本士族の熊本共同隊、民権党隊等多数あった。このように西南戦争の参加者は、明治政府に不満を持つ人々の集合体と考えても良いものである。熊本だけでなく人吉、延岡などからの参加もあった。

私たちの住む大分県では中津藩士増田宋太郎ますだそうたろう率いる中津隊が三月に中津で蜂起、西郷軍に合流している。佐伯藩では始め取り立てて大きな動きはなかったが、西郷軍が宇目重岡に侵攻した後、佐伯士族数十名が新奇隊しんきたいとして隊を組み参戦している。新奇隊は西南の役末期の結成であり、延岡隊の一部として活動した。戦闘の様子はほとんど記録として残されていない。

大分県内の士族の中では臼杵士族が唯一の官軍として西郷軍を臼杵城で迎え撃っている。この臼杵での戦いに詩人中根貞彦の父が参戦戦死している。

私たちは、熊本城から最大の激戦地である「田原坂」に向かった。

田原坂は、熊本県熊本市北区植木町豊岡一帯の地名である。今は金峰山県立自然公園に指定され、平成二十五年(二〇一三)三月、西南戦争遺跡の一部として国の史跡に指定された。

熊本城の北西八キロメートルに位置する丘陵きゅうりょうである。明治十年三月四日から三月二十日までの十七日間三万の西郷軍と熊本城奪還をめざした官軍六万が激突し壮絶な死闘を繰り返した場所である。

田原坂の戦いは、一進一退の戦いが繰り広げられ、官軍は一日平均三十二万発余りの小銃弾を使ったと伝えられている。その為、敵味方の小銃弾が空中で衝突「かち合い弾」を生じたという。山鹿やまが、植木うえき、このはこのは、高瀬たかせ、吉次峠きちじと戦いは続き、この田原坂の戦闘もその中の一幕であった。田原坂は幅四メートル、長さ一・五キロメートルの緩やかな坂道である。標高差は六十メートル、この狭い場所であら軍が激突したのである。当時の被弾した民家が田原坂公園に保存復元されている。

熊本県民謡「田原坂」に「雨は降る降る人馬は濡れる。越すに越されぬ田原坂 右手みぎてに血刀、左手ひだりてに手綱、馬上豊かな美少年」と歌われている。

田原坂戦闘図

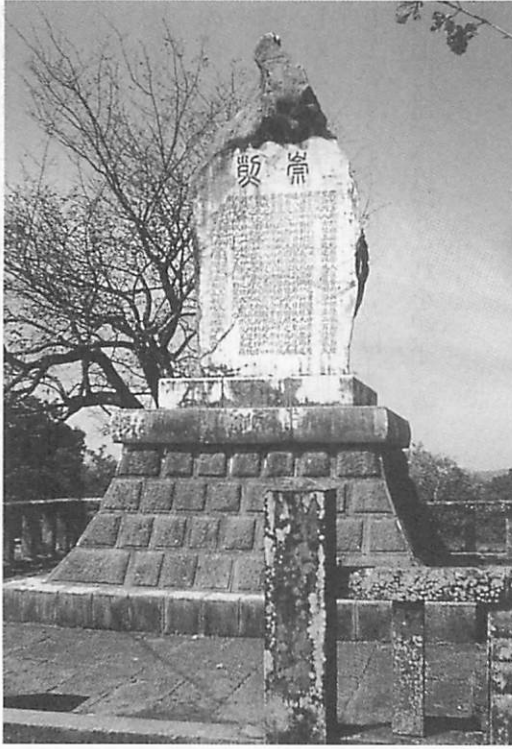


田原坂激戦之図 (鹿兒島新報・小林永濯画)

この馬上の美少年は、激戦中に兵士不足から参戦を余儀なくされた薩摩の十五六歳の少年兵士の姿であった。多くの弾丸の飛び交う中、士族が抜刀隊を結成し敵陣に切り込んだ話も残されている。

私たちは、この田原坂公園の史料館で、当時の様子を垣間見ることができた。

公園の一角には、「崇烈の碑」が建てられている。



この碑は、田原坂を中心に激突した官軍・西郷軍の兵士を悼む慰霊碑である。戦いの様子がうたわれている。碑

文は、征討大提督有栖川熾仁親王が・撰文・篆額し、陸軍省六等出仕の秋月新太郎が書いている。

秋月新太郎の父は、秋月橋門と呼ばれ佐伯四教堂の教諭で、のち葛飾県の知事となった人である。

新太郎は幼き時、日田の咸宜園にて学習し、藩校四教堂の助教を勤めた。のち東京女子高等師範学校の校長になっている。

この「崇烈の碑」の碑文は漢字で書かれており、訳すると次のようになる。

鹿児島県は西海において地は最も広く、人は最も勇にして西郷隆盛の名望は世を覆い、海内の人士はその進退をうかがい、以て安危となすに至る。

明治十年二月、隆盛は反して熊本城を囲む。天皇は震怒したまい兵を発してこれを討たしむ。熾仁を総督の責に任じ、陸軍中将山県有朋、海軍中将川村純義が参軍たり。賊は兵を分かちて植木山麓の両道を扼す。進んで高瀬に入る。二十七日我軍は高瀬を撃取し、越えて四日に木場を抜く。賊は退いて田原坂の險に拠る。

而して熊本の本を益々密にして援路は皆絶ゆ。

それ田原坂の地たるや両崖は壁立し経路は崎嶇たり。

賊は悉く精銳にして堅壘を築き咆哮して出沒するは虎狼のごとくあり。要害は形を異にして我軍は殊に死線なり。昼夜を過ごす事十有七日、遂にこれを抜く。

死傷数千人はこの役なり。応戦は前後数百に及ぶ、田原坂の劇のごとくは有らざるなり。いやしくもこの坂にして抜かずば、賊をして南関を破りて北すれば、則ち四方不逞の徒は必ず隙に乗じて起こり、禍は測るべからず。而してそれをこれに至らしめず、速やかに討滅を遂ぐるに至らしめるは、實に一捷による。嗚呼、死者の功は大なり。而していづくんぞ見るに及ばず、痛ましきかな。因つて碑を阪上に建て、以てこれを記す。蓋し忠烈を勸奨する所以なり。

明治十三年十月

と書かれている。

この付近には、七本官軍墓地や七本柿木台薩軍墓地、向坂官軍墓地などある。私たちは七本官軍墓地にお詣りし冥福を祈った。

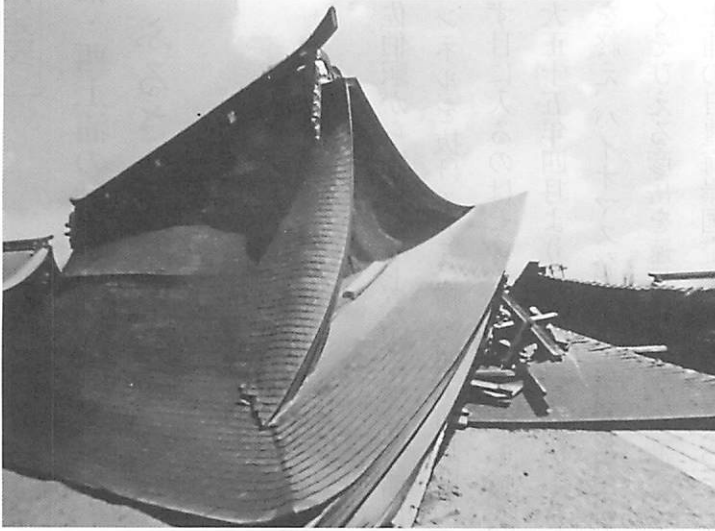


田原坂公園にある美少年像の前で説明を聞く史談会員



西南戦争の激戦地「田原坂」の見学を終え、私たちは帰途についた。その途中、今回の最後の研修地「阿蘇神社」にお参りした。

阿蘇神社の山門は、昨年来の地震で崩壊し、現在復興中である。参道から境内を見渡すと、楼門は解体されビニールシートにおおわれていた。



地震倒壊後の阿蘇神社楼門（国重要文化財）

この阿蘇神社は、熊本県阿蘇市にある阿蘇一の宮で、祭神は健甕竜命たていわたつみことと呼ばれる神様です。

この地方を治めていた阿蘇氏は佐伯氏とかかわりがある。その話を聞きながら帰途について。

南北朝時代、佐伯氏六代佐伯惟宗は、北朝足利尊氏の命を受け、日向の土持氏つちもちとともに、南朝の肝付兼重氏と戦っていた。ところが御醍醐天皇の皇子、懷良親王かねよしが征西將軍として九州に入るや、七代佐伯惟仲や八代佐伯惟秀は南朝に奉仕し、肥後菊池氏や阿蘇氏を支援するようになった。肥後国の菊池氏や阿蘇氏を支援するため、一族郎党を肥後に送り込んだ。

正平二年（一三六七）五月、佐伯山城守惟仲は阿蘇大宮司佐伯惟村にかわって功を顕わしたという。

後に阿蘇大宮司は、在任の佐伯一族に波野村なみの榎木野の地を給与して、豊後方面の備えとしたという。

南北朝の動乱が終結したのち、佐伯一族はここに留まり榎木野氏を称し、戦国時代以後、榎木野の佐伯一族は阿蘇郡内（榎木野、滝水、宮地、色見）に転任し、熊本近世時代には郷士となったという。

阿蘇氏との関係を考えながら帰途についた。